

平成21年度横浜市次世代育成支援行動計画 第1分科会（第3回）会議録	
日 時	平成21年9月11日（金）14:00～16:00
開催場所	松村ビル本館地下1階 マツ・ムラホール
出席者	伊志嶺委員（座長）、奥山委員、小林委員、菱川委員、柳井委員、矢野委員 渡辺（久）委員、渡邊（英）委員、土山委員
欠席者	河原委員、白井委員、関山委員、三輪委員
開催形態	公開（傍聴者 2人）
議 題	1. 地域における子育て支援の充実 ア 子育てを取り巻く状況 イ 地域子育て支援の施策について ウ 協議内容について エ 意見交換 2. その他
決定事項等	特になし
<p>議事</p> <p>1. 地域における子育て支援の充実</p> <p>ア 子育てを取り巻く状況（事務局）</p> <p>イ 地域子育て支援の施策について（事務局）</p> <p>ウ 本日の協議内容について（事務局）</p> <p>〔説明内容についての質問〕</p> <p>（柳井委員）</p> <ul style="list-style-type: none"> 資料3の「人材育成」について、学校との連携によりボランティアの受け入れを進めているとはどういう意味か？（教育という意味かどうか） <p>（奥山委員）</p> <ul style="list-style-type: none"> 港北区地域子育て支援拠点「どろっぷ」では近隣の中学校（職業体験）、県立高校（家庭科、教職員研修、クラスごとの実習）と連携。このほか、学生以外の一般ボランティアも受け入れている。区、区社協との連携で、夏の学生ボランティアの募集、研修をしたのちに、プレイパークやサロンへのボランティアに行ってもらうなど、区内全域を対象にした「ボラリーグ☆こうほく」という事業も行っている。 <p>（矢野委員）</p> <ul style="list-style-type: none"> 前期計画での主な取り組みに「子育て情報提供の仕組みを検討」とあるが達成されたのか、「検討」が目的なのか？また、情報提供の区ごとの状況はどうなっているか？ <p>（事務局）</p> <ul style="list-style-type: none"> 前期計画のH21末での計画目標は情報提供の「推進」である。ホームページでの情報提供については、こども青少年局ホームページ「ヨコハマはびねすぽっと」という子育て情報を集約したものを開設した。各区のHPでも情報提供が工夫されており、港北区ではメールマガジンも利用されている。 <p>エ 意見交換</p> <p>〔はじめに奥山、渡邊（英）、菱山各委員から各立場からの意見〕</p> <p>（奥山委員）港北区をはじめ、横浜市は転出入が激しく、家族形態もさまざまであり、その中での仲間づく</p>	

りが課題である。神奈川県は全国で通勤時間が最長であり、父親の子育てへの参加が難しい状況でもある。つどいの広場は遊ばせる機械や場の提供、親のリフレッシュや場の提供になっている。広場には専業主婦だけでなく、育児休業中の母親もいる。育児休業中は集う場が無く、誰でもが来られるスタッフのいる広場などが来やすい。支えあって子育てしていく場にする必要がある。

(渡邊 (英) 委員) 0~2歳の間に子どもとどうかわるか、親子関係の作り方がとても大事である。最近の親は子どもを放任するか、過干渉かの両極端が多い。親子関係の難しさを感じる。人間関係の脆弱さが親子関係にも出てくる。保護者の問題としては、子育てはみんなでやっという気運、父親も入って考えることが必要であり、その際には、子どもが子どもらしく成長することに大人が目を向ける、大事にする視点が大切である。

(菱川委員) 保育園では父親が送迎や行事でも積極的に子育てに参加しているケースが多い。

子どもがもつ自発的な「遊び」の欲求を大切にしなければならない。場をつくる、モノを用意するといった取り組みだけではなく、子どもの自発的な遊びを考えた取り組みが重要である。公園で子どもを遊ばせながら携帯メールをしている母親がいるが、子どもとずっと関わってほしい。居場所作りを考えるときには人との関係性をキーワードとして考えることが重要である。

子どもの発達について、発達の障害か個性かについて判断が難しく、早い段階で専門機関との関わりが必要である。

[意見交換]

(奥山委員) 子育て支援の場に共通するのは相談機能である。地域子育て支援拠点・親と子のつどいの広場・保育所センター園という、類似機能を持つ施設の合同スタッフ研修を行ったが、お互いにどのような課題があるのか発見でき、ネットワークづくりや人材育成にもなった。施設長同士の連絡会はあるが、母親の悩みに実際に関わるスタッフ同士が学べる研修会などの機会が重要である。

(柳井委員) 働く女性にとって育児休業中は子どもと過ごせる大切な時間。孤独な子育てにはしたくない。

学校現場でも幼稚園・保育園と同じ状況がある。競争原理が導入され、子どもも教職員も伸びやかに過せない。いわゆるモンスターペアレントも多く、0~2歳の時期の孤独な子育てとも関係しているのではないか。子どものための視点を大事に考えた環境づくりが大切である。

(土山委員) 発達の障害か個性かについて、「障害ではない」といつてくれるところにしか相談しない親もいる。子どもが年齢ごとに身につけるべきものの優先順位があるはずなのに、「おむつが取れたから障害ではない」など、親が情報に振り回されている状況がある。

(渡辺 (久) 委員) 子どもという存在を理解できない、向き合えない親が増えている。人として思春期に成熟せずに親になっている現状がある。親子の居場所づくりにおいても、母親の社交の場になることのメリット、デメリットがあり、大人のフラストレーション解消よりも子どもが十分に遊べる空間づくり、子どもを本気で見ようとする視点を打ち出すことが大事である。子どもから学ぶ空間、子どもと向き合う空間づくりが必要。

発達障害と言われて病院に来るケースの中に、障害ではなく子どもの体験不足というケースが見受けられる。子どもの情動を成長させる遊びが不足している。発達段階に応じて十分に遊べる空間をつくり、親はエチケットを守って参加することが必要である。また、100人の母親のうち13.5人が産後うつというデータがあり、親のうつ状態からそれが子どもの発達障害につながる可能性もある。小児療育センター等の医師など専門家が現場を知ることも大切で、子どもが生活を送る場である幼稚園や保育所に専門家が出向き対応できる仕組みづくりが必要である。

(奥山委員) 0～2歳は幼稚園・保育所を利用していない親が多いが、週1回でも保育を行うことで、子どもが生き生きと遊ぶ環境づくりが必要である。多様な形で子どもが集団で集える場が必要であり、親の学ぶ機会にもなる。

(渡邊 (英) 委員) 幼稚園でも泥んこ遊びをさせない園もあるが、親からの汚れる、洗濯が大変、衛生面で気になるなどの声が大きくなって、子どもらしく遊ぶことの大切さや子どもの世界を守ることの難しさを感じている。それを経験せずにつく子どもが心配である。

母親のケアとしては、地域の中に子ども同士、母親同士の関わりができることよい。幼稚園も、将来的に幼稚園を利用する地域の親子の支援と考え、未就園児に施設を活用することも考えられる。幼稚園の役割としては、保育園と同じように長時間預かるという方向だけでなく、親が集う場になることはできないか。幼稚園はまっ子広場も、親子の広場を運営する団体に委託するなどの方法も考えられる。

(菱川委員) 子どもの遊びの原体験をどう作るかが重要である。単に安全に過せる場所があればよいではなく、子どもたちに遊びをどう伝えるか、遊べる環境が作れるかの責任がある。

(小林委員) 地域の親子の相談にのっているが、母親が体調を崩しても子どもを預ける施設が少ない、子育てサポートシステムがあるけれども急病になったときに預けられるところが無い、あっても遠いという問題がある。現場のスタッフ同士の研修の横のつながりも少ない。つながるシステムがあればと思う。

(矢野委員) 情報提供の方法について、内容は各区や拠点ごとに様々だと思うが、システムは全市でつくることできないか。

(事務局) 港北区のメールマガジンは市のシステムを活用している。コンテンツは区と地域が連携して作成している。

(奥山委員) 港南区や都筑区でも独自の情報提供を行っている。港北区ではシステムは市のものを利用している。1か月に1度、情報編集会議（行政関係者や現場のスタッフなど）を開き、毎週メルマガを発信している。情報は一方通行ではあるが、地域の人がメルマガの威力を感じ、定着している。

(渡邊 (英) 委員) 父親は参加すれば大きな力となるので、参加への取組を支援してほしい。小学校も含めてオヤジの会の充実が大切である。子育て支援は横のつながりづくりが多いが、親たちが縦につながることも重要である。親たちのつながりができれば、おしゃべりの中で済む話が、孤独な子育てをしている人には相談が必要になる。親がそういったつながりを持てる場の検討ができないか。

(土山委員) 障害児も同じく親の縦のつながりが重要で、先が見えない中で同じ立場で相談ができる。専門的ケアも大事だが、ピアカウンセリングの重要性を感じる。

(柳井委員) 地域社会のコミュニティの重要性を根本から考えないといけない。第2分科会でも同じ議論があり、お祭りの再生等を通じてなど、大胆な発想がなければ縦のつながりも横のつながりもできないとの意見があった。

(伊志嶺委員) 子どもの発達を保障する視点が「子育て支援」という括りの中で見えなくなるように感じる。子どもが健やかに過ごすにはどうすればよいか、親の安定が子どもにもよい環境である。0～2歳の家庭での子育ての孤立化について、うまく人とつながることができない悩みなどを、拠点や広場でニーズをくみ取り、専門家も含めた適切な対応を場としても情報としても提供できることが重要。現在の親は「子どもを人並みに」という横並び意識が強すぎて、子どもと向き合う楽しさをもちていない。親の同士のつながりが作られる場を作ることが重要で、年齢を通した縦のグループ、親同士の信頼できるグループでじっくり話ができる機会が必要である。

産前から子育てのイメージが持てる情報提供、ニーズにあわせた対応ができる情報提供の仕組みがあ

るとよい。

人材育成のためにも研修も含めた交流の場が必要。地域資源として地域で活動しているグループもさまざまあり、人的な資源をどのようにつないでいくか、活動の場づくりもネットワークづくりの課題である。

(柳川委員) 渡辺(久) 委員からあった専門家による支援チームが幼稚園や保育所を巡回するという取組も、ネットワークづくりになるのではないかと。日常的に顔が見える規模でのチームがよい。

(奥山委員) 産前産後から成長に応じて切れ目無く支援できるネットワーク、情報も人的支援も連携が受容。広場事業やサロンなど地域の事業は数多いが、類似事業をやっている人の連携ができていない。

(渡辺(久) 委員) 妊娠～出産～はじめの2週間におけるスタートラインの母親の成長が重要である。例えば、母親への支援としてイギリスでは1人の決まった担当保健師が母親を産前から知っており、産後2週間は毎日訪問する。これで人間的絆ができる。そのあとは母親が困ったときに気軽に相談できる。

小児科医や心理士も含めて、専門家の中には普通の出産・育児を知らない人も多い。現場に日々、専門家がいき、普通の子どもの発達を見せる場として、幼稚園・保育園・広場等が生かせるのではないかと。

(伊志嶺委員) カナダにも産前からグループワークにつながっている子育て支援の仕組みがある。ここに連絡すると何とかなる、というシステムになっていることがよい。

(渡邊(英) 委員) 私立幼稚園で地域のネットワークにつながっている園は少ない。私立幼稚園も公性を持って施設や場を提供するなど、地域の子育てに参加できたらと思う。幼稚園の活用の仕方を考えたい。また、幼稚園の卒園児の親たちの力を0～2歳の子育てに活用できないか。

2. その他

- ・7/13の子育て支援シンポジウムのポイントをまとめた添付資料あり
- ・次回は9/24(木)、14時から16時にマツムラ・ホールで行う。

以上

資料	(事務局からの発表 関連資料) 資料2 子育てを取り巻く環境、乳幼児期の子育て支援施策 資料3 協議内容(これまでの第1分科会での主な意見)
----	--